

史 村 さん 64 納 さ よ り 恩 編 だ

名嘉真の豊年祭

農作物の収穫を終えた旧暦8月15日前後、豊作を神に感謝し、次期の五穀豊穡を願う豊年祭（村芝居ともいう）が毎年村内各地で行われます。近年では地域の諸事情に合わせ、時期をずらして開催されることも多くなっています。（表参照）

名嘉真ではもと「二才中」という組織が豊年祭を取り仕切っていました。『いやしの里 名嘉真』によると「二才中」は学校卒業後から男37歳、女22歳までの区民で結成された組織で、結成された年度は不明だが村芝居で使われている組踊の台

行政区	開催日時	実施
名嘉真	10月13日	毎年
瀬良垣	9月24日（旧暦8月15日）	〃
恩納	9月22日	〃
南恩納	10月14日	3年に一度
仲泊	なし	4年に一度
安富祖	10月7日	不定期

本が、明治42年に作成されている。また王朝時代に娯楽普及係りが居て農村に普及したようです。前にも村芝居等があったものと思われ「とありま

が、生活環境の変化などから、二才中だけで取り仕切ることが厳しくなり2006年から字主催の豊年祭へと変化しました。

また2016年まで豊年祭の時期が近付くと、地域の方の協力の下、旧公民館前に鉄骨で組んだ舞台を設置していました。練習、本番が終わるとまた解体するという大掛かりな作業が毎年行われていたのです。

2017年には山手の方に名嘉真区多目的施設が完成し、豊年祭で利用できるように設計されたコンクリート製の屋外舞台も造られました。舞台前にはゆっくり鑑賞できる芝生スペースが広がり、今年もたくさんの方の素晴らしい演目が披露されました。その中から三演目についてご紹介します。

《ミルク》

現在、村内各地で行われる豊年祭演目で「ミルク」があるのは、名嘉真だけです。

恩納村史歴史編専門委員の城間義勝氏が、仲嶺真武区長から聞き取りした調査記録によると「仮面の素材は発泡スチロールである。これは川に流れているものを引き揚げたものである。名嘉真に手先が器用な人がいるので、頼んで作ってもらった。面、胴、背中の三つをつけ、その上から着物を羽織る。腰に籠を付けて、右手に軍配を持っていく。籠にはお菓子が入っておりそれを子どもたちに投げる」とのこと。

わらべうた「ミーミンメー」の曲に合わせてミルクが登場すると、子どもたちが舞台前に横一列に並び、両手を広げてお菓子をもらう様子がとても微笑ましかったです。



ミルクとかけ寄る子どもたち

《南ノ島（フェーヌシマ）》

村内でフェーヌシマがあるのは、名嘉真と仲泊です。フェーヌシマの起源については諸説あるようですが、『沖縄大百科事典』によると「棒踊の一種だが、麻の繊維を染めた赤褐色のかつらをかぶり、三尺棒または六尺棒の一端に音を出す鉄輪をつけ、奇声を発して飛び跳ねる所作をとまなうほか、棒技の部と素手の芸の部で構成されるなど、様式も系統も棒踊りとは異なる。」とあります。

名嘉真出身の故・仲村好正氏の手記にも、名嘉真のフェーヌシマの所作について「指笛と三線鳴り、それに合わせてトンツン小と呼ばれる笠をかぶり拍子木を持った者が2人、舞台の角